

<その他（シナリオ）>

短編映画シナリオ『夏の光』

佐藤克則

A short screenplay 'Light of Natsu'

Katsunori Satoh

Abstract

Natsu is a 19 years old girl who attends an acting school. She and her classmates Kaori, Masa and Keigo are rehearsing for a drama called, 'A Story of Captain Miranda'. Natsu has a special ability to hear the thoughts of people she likes through a light-like aura.

One day after school, Kaori asks Natsu and Masa to find out if her boyfriend Keigo likes another girl. Natsu can hear the thoughts of Kaori and Masa but not Keigo. At the beginning, she fails to hear his thoughts, but by making contact with him, she begins to fall for him. Natsu begins to see his light aura and can hear his thoughts. She eventually finds deep in Keigo's mind that he loves Natsu instead of Kaori, but does not yet notice his inner feelings and refuses her. At the end, Natsu becomes aware of the light of herself. A story goes with scenes of rehearsal, which shows changing of relationship between characters and symbolizes the story itself.

1 舞台の稽古場（12番教室）

薄暗い照明のなか、相澤夏（あいざわ なつ・女・19）が、うつむいている。

夏の声「わたしには不思議な力があるのです」

夏、ぱっと顔を上げる。

夏「嵐だ！嵐がくるぞ！」

そこは、舞台の稽古場。夏の周囲には、マサ、香織、圭吾、他、数人の役者が演技している。

舞台は船上の設定。役者達は、嵐にそなえてバタバタとうごいている。

マサ「ミランダ船長！魔女達の追っ手も現れたぜ！」

マサが台から降りて、夏の元へ駆け寄る。

夏、マサをじっと見つめると、

青い光がマサから感じられ、

夏の声「特別な光」

マサの心の声が光と共に、夏に聞こえる。

マサの声「こっちこい、こっちこい」

その声に合わせて、夏は、マサのほうへ行く。

マサ、夏の腕にしがみつく。

マサ「ミランダ船長、どうすりゃいいんだよ」

夏の声「マサは分かりやすいなあ」

夏、マサの手を振り払う。

すると、香織が来る。

香織「笑っている場合ではありませぬ、ミランダ！」

香織からも光を感じる夏。

香織の声「ちょっと近いな、離れてくれると」

夏の声「あ、ごめんごめん」

夏、香織から距離を取る。

夏「指示？指示ならとっくに与えてるではないか！」

次に、圭吾が夏の元へ。

圭吾「それだけで船は動きませぬ」

夏、ちょっと渋い顔。

夏の声「やっぱ、圭吾君の光は見えない...分からないや」

夏と圭吾、ちぐはぐな芝居をする。

夏、圭吾のもとを離れ、台に上る。

夏「さあ、いざゆかん、あの嵐の向こう側へと。雨や風や荒波が」

演出家「もういい、やめろ！」

と、そこで、舞台の前にいた演出家が手をパチンと叩く。

芝居がストップする。

シンと静まる稽古場。険しい顔つきの演出家。

演出家「夏」

夏「…はい…」

演出家「お前、船長だろ、みんなを引っ張るんだろ？」

夏「…いちおう」

演出家「受け身の芝居ばっかしてんじゃねーよ、全部回りに合わせてばっかだろうが！」

夏「……」

演出家「もっと自分出せ」

夏「…はあ」

演出家「…罰…自己紹介」

夏「え？」

演出家「自己紹介だよ、早く」

夏「いや…あれは…もう…」

演出家、じっと夏を睨む。

マサ、夏の近くで笑いをこらえている。

マサから青い光を感じる夏。

マサの心の声「また自己紹介だよ、アホだ、こいつ」

夏、マサを睨む。

演出家「はーやーく」

夏「……相澤夏です…19歳です、南活芸術学院俳優科1年」

演出家「もっと早く！でかい声で！」

夏「南活芸術学部俳優科1年、相澤夏です！高校時代から演劇部で、私が演劇をやりたいと」

演出家「それ前に聞いた、違うの言え」

夏、ひたすら自己紹介を続ける。

夏の声「私には不思議な力がありまして、他人の考えてることが、光となって見える力があるのです。でも、その光が見えるのは、あたしが好きな人だけ。だから、もちろん、この演出家の先生が何を考えているか、なんてのは、分かるはずがない訳でして…」

演出家「もっと違うやつ！」

夏「（やけくそ気味な大声）はい！私はコアラが大好きです！コアラのお尻がまるくて大好きです！！」

2 メインタイトル 『夏の光』

3 同（稽古場）・放課後

稽古が終わった後の稽古場。

部屋の片隅で、ぐったりと疲れた夏がだらしなく床に寝ている。

その側でマサが帰る支度をしている。

マサ「（歌う）コアラのお尻～コアラのお尻はまんまるだ～」

夏「うるせ～あっちいけ」

夏、自分の稽古靴をマサに投げるが、マサは歌い続ける。

夏「こいつの名前は、マサ、と言いまして、俳優科のクラスメイトです。なぜか、出会った時から気が合ってしまったと言いますか」

*

*

*

マサがカメラ目線。

マサ「あー、マサって呼んで、マー君で読んでいいのは、俺の彼女だけだから、そこんところよろしく」

夏「…（カメラ目線・マサをじっと見つめる）」

マサの声「（光を感じて）彼女なんて実はいないけどねー、てか俺童貞だしーはは〜」

夏の声「彼の考えが手に取るようになってしまい、女子と付き合ったことがないのに、大口ばかり叩く彼が何故か憎めず…」

別の場所で、マサがカメラ目線。

マサ「いやー、昨日もナンパしちやってさあ、3人对俺1人で、もう、俺、死んじゃうかと」

夏「…（カメラ目線・マサをじっと見つめる）」

マサの声「（光を感じて）早く帰って昨日のゲームの続きしてー」

* * *

稽古場。マサ、まだ歌っている。

夏の声「いや、だいぶ憎たらしい男ではありますが、あたしはこいつに恋愛感情などこれっぽっちもなく、こいつも、あたしをまるで女として見ていないところが、非常に気が楽なのであります』

4 学校・自転車置き場

夏とマサが歩いて自転車置き場へ向かう

マサ「だから〜、男と女ってのはさあ言葉じゃないの、空気、2人を包む空気な訳よ、俺なんか、そういう空気、すぐ感じとっちゃうからモテるんだろうね〜」

夏「は〜、そ〜ですか〜」

と、話半分で聞いている夏が、遠くに圭吾と香織がいるのに気づく。そして、マサの服を掴んで動きを止め、物陰に隠れる。

圭吾と香織は喧嘩をしている様子。

マサ「なんか、喧嘩してねーか」

圭吾「恋人同士なんだから、そりやするでしょ」

マサ「え？あの2人付き合ってるの？」

夏「は？知らなかったの？」

マサ「マジかよー」

マサ、夏を押し分け、喧嘩を見つめる。

夏「あんた…男と女の空気、ぜんぜん読めてないじゃん」

マサ「あー、香織、泣きそーだー、圭吾、冷たい目ー、ひょークールだぜー」

圭吾、香織を置いて、自転車に乗って行ってしまふ。

一人残される香織、ふと、視線を2人の方へ。

マサ「あ、やべ」

マサ、物陰に隠れると、バランスを崩した夏が表に押し出されてしまう。

香織の前に飛び出してしまった夏。香織も夏に気づく。

夏「あ…ははは…（笑顔を取り繕い、浮ついた声で）香織ちゃん、お疲れ〜」

5 同・ベンチ

自転車置き場の脇にあるベンチ。

夏とマサと香織が並んで座り、ジュースを飲んでいる。

いずらそうにしている夏。

落ち込んだ表情の香織。

難しい顔つきのマサ。

マサ「圭吾は…浮気してるね」

夏「はあ!？」

香織「そうなのかなあ…」

夏「（香織に）いや、ないよ、ないない（マサに小声で）適当なこと言うなよバカ！」

マサ「そりゃ本命は香織だよ、でも、誰か他にいるんだよ」

香織「そう！あたしもそう思ったた、誰か他に気になる人がいるんじゃないかって」

マサ「だろー！」

香織「マサ君すごいなあ、経験豊富だから、すぐ分かるんだね」

マサ「（夏に自慢げな顔つきで）あー、そーなんだよ、経験が豊富すぎちゃうからな俺」

夏「（香織に違う違う違うというジェスチャーをする）」

香織「あのさ…こんなこと頼んでいいのか…分からないんだけど」

マサ「ん？」

香織「圭吾に聞いてもらえるかな、誰か、気になる人、っていうか、好きな人いるのかって」

マサ「もちろん！まかせなさいよ！」

香織「ほんと？あたしが聞いても喧嘩にしかならないから」

マサ「あー、平気平気、俺たちがバシッと圭吾に聞くから、な？」

夏「…え！？あたし？あたしも聞くの！？は！？」

マサ「当然だろ（香織に）こいつなんかミョーにカンがいいっていうか、人の心が読めるっていうか、とにかくそういうの得意だから」

夏「（マサの言葉にギクっとする）」

香織「（夏に）お願いできる？」

夏「あー…ははは、えーと、ねえ…ははは」

マサ「大丈夫！恋の悩みは俺たちがすべて解決さ！なあ？はははは」

苦笑いの夏。大笑いのマサ。

夏の声「てな感じで、明日の早朝、いつも圭吾が一人で朝稽古してるというので、そこに押し掛けて話を聞く、という作戦をマサと立てたのですが…」

6 学校・稽古場（朝）

夏は、一人で、稽古場の入り口の前で携帯を持つ。

夏「電源切ってやがんな～、ちくしょ～あのやろ～」

夏の声「もちろんマサが、来るはずもなかった訳で…」

夏、携帯をしまい、暗い表情で中に入る。

すると中では圭吾が一人、柔軟体操をしている。

夏、無理な作り笑いをして、圭吾に向かい、

夏「おはよー！」

と元気よく挨拶をする。が、圭吾は、夏をチラリと見ただけで、柔軟を続ける。

夏の声「うわー、感じわるい～」

夏、笑顔を必死に保ちつつ、圭吾から離れた場所に座る。

夏の声「…ん～、やっぱ駄目だ～、光がぜんぜん見えない…」

夏、うつむき、あきらめかけるが、再度顔をあげ圭吾を見つめる。

夏の声「くじけちゃ駄目よ夏！好きになればいいの、どんな人にだって、良いところがある。好きになる努力、好きになる努力…」

夏、ぶつぶつと口ごもりながら、じっと圭吾を見つめる。

夏の声「まあ…顔はタイプかなあ…」

すると、圭吾も夏のほうを見つめる。

圭吾「何してんの？」

夏「え？」

圭吾「朝稽古しにきたんじゃないの？」

圭吾「あ…と、あたし…は…」

圭吾「…稽古しないんなら…気が散るから、外、出てってよ」

夏、びっくりした表情。

夏の声「えー！」

7 同・稽古場・昼休み

チャイムが鳴る。学校の昼休み風景。

おのおの、弁当を食べたりしている。

* * *

稽古場の隅で落ち込んでいる夏。

その隣で弁当を食べているマサ。

夏「クラスメイトの女の子にさ…そんなん言うって有り得るの？」

マサ「で、好きな人、聞けた？」

夏「聞ける訳ないでしょバカ！」

夏、対角線上にいる圭吾と香織を見る。

圭吾は床に寝ていて、側で寂しそうに香織が弁当を食べている。

夏「……香織ちゃんも、圭吾君のどこがいいんだろか…謎だ」

マサ「どこがいいって、そりゃあなた…」

夏、マサの頭をパチンと叩く。

マサ「いって一な！なんだよ！」

夏「いまエロいこと考えた」

マサ「考えてねーよ！ったく…」

マサ、圭吾と香織に視線を戻す。すると、ムフツという笑いがこぼれる。夏、またマサの頭を叩く。

マサ「痛いって！」

夏「今度はもっとリアルに考えたでしょ！もう気持ち悪い！死ね！」

夏、立ち上がって、その場を離れる。

すると、入り口に、学院の職員が現れる。

職員「お、相澤さん、ちょうど良かった」

夏「へ」

職員「午後の授業が変更になって、映画を見る事になったから、プロジェクターの準備お願いしたいんだけど」

夏「えー、なんであたしー」

職員「いや、ちょうど今いたから」

夏「今あたしすげー落ち込んでるんですけどー」

職員「（無視して）あと男子、誰か」

夏「あ、じゃあマサが（と言って振り返ると）って、いねえし！」

マサ、姿を消している。

夏「やろ〜、また逃げやがった〜」

職員「あ、じゃあ、圭吾」

寝ている圭吾。香織が気づいて、圭吾を起こす。

香織、圭吾に説明する。

夏「…いや、あたし…1人で準備しますよ」

職員「機材けっこう重いから。じゃあ圭吾、よろしくね」

眠そうな圭吾、うなずいて立ち上がり、入り口へ。

夏を無視して、そのまま外へ出て行ってしまう。

夏「…」

香織は、夏に手を合わせて『ごめん』というサインを送る。

夏「…ははは」

夏は苦笑いをして圭吾の後を追う。

8 同・別教室

プロジェクターの準備をしている夏と圭吾。

気まずい空気のなか、夏はチラチラと圭吾の様子を伺っている。

圭吾「そこのケーブル取って」

夏「あ、ケーブル、はい」

夏、慌ててケーブルを手に取り、圭吾に渡す。

圭吾、ケーブルをプロジェクターに付ける。

圭吾「香織になんか言われたの？」

夏「え？」

圭吾「あいつ最近テンパってて、なんか変なこと、お前とかマサに言ってるのかなって」

夏「あー、と…ないよ、うん、ない…」

圭吾、部屋の電気を消す。薄暗くなる部屋。

圭吾「…別に俺は何言われてもいいんだけど、あいつ弱いし、まわりが騒ぐと余計、気にするから」

夏「…」

圭吾「それに、俺たちのせいで今度の舞台、壊したくないしさ」

夏、圭吾の顔をじっと見る。

圭吾「DVDは？」

夏「え？ああ、DVD、はい、これ」

夏、DVDを渡す。

圭吾「あー、この映画、俺これすげー好き、見た事ある？」

夏「（首を横にふる）」

圭吾「こんな地味な映画、選ぶなんてセンスあるなー、ははは」

と圭吾は笑う。夏はその笑顔を見つめる。

夏の声「ああ、この人…こんなふうに笑うんだ」

そのとき、白い光が夏に訪れる。

夏の声「え？」

夏の体が白い光に包まれる。

部屋ではプロジェクターの光。

圭吾「どうかした？」

夏「あ…いや…なんでもない…あたし、他にも用事頼まれてて、ごめん、ちょっと、いくね」

夏、慌てて外に出る。

夏の声「なんだろ…？…初めての光の色…」

9 同・上映（昼）

映画が上映されている。

それを見ている生徒。圭吾と香織は並んで座って見ている。

マサ「（映画に向かって）ないわー、そこでなんで抱いちやうのよー、ないわー、こいつないわー」

夏はマサの後ろの席。眠っているフリをしながら、ずっと圭吾を見ている。

* * *

映画が終わり、教室の電気がつく。

俳優科の生徒、ぞろぞろと出て行く。

マサ「夏、お前今日なんかあんの？って、あれ？」

すでに夏はいない。

10 教室の外（昼）

夏、教室の外に出て、圭吾と香織の後を追う。

夏「あのさ！」

振り向く圭吾と香織。

夏「…あの」

香織「…どうしたの？」

夏「あ…、と、いや…あの…」

夏、ちらと圭吾を見ると、白い光を感じる夏。

圭吾の声「なに慌ててんだろ？」

夏の声「やっぱ、こんな光の色、初めてだ」

夏「（圭吾に）今日の朝はごめん」

香織「え？」

夏「あ、圭吾君の朝稽古ジャマしちゃったから、もうしない」

圭吾「別にいいよ」

香織からは青い光を感じる夏。

香織の声「なっちゃん、なんかいつもと違う」

夏の声「香織ちゃんは、いつもの青い光」

夏「あはは、それだけ、ごめん、じゃあ、また明日！」

夏、去って行く。

11 土手の道（夕）

夏が土手沿いの道を歩いて帰って行く。

胸のあたりを押さえ、心臓の高鳴りを聞いている。

夏の声「…なんだろう、こんなの初めてだ…」

夏、立ち止まり、川に向かって『あー！』と叫び、走りだす。

12 学校・稽古場（昼）

舞台の稽古。夏と圭吾が掛け合いをしている。

圭吾「それだけでは船は動きませぬ」

夏「そう思うか？セバスチャン」

夏、圭吾の脇をすりぬけて歩く。

圭吾、夏の前に回り込む。夏、圭吾の白い光を感じる。

圭吾「もう一步、先に俺がいく、もうちょっと待て」

夏の声「そっか…圭吾君、こんなふうにしてたんだ」

夏、圭吾の言葉の通りに動く。

前よりスムーズに行く2人の芝居。

*

*

*

芝居が止められ、演出家が駄目出しをする。

演出家「夏」

夏「…はい」

演出家「まだ受け身だけどなあ、この前よりはいいよ」

夏、少し微笑む。

その夏を無表情でみつめる香織。

13 同・時間経過（昼）

稽古が終わった稽古場。

夏のところへ圭吾が来る。

圭吾「ちょっといい？」

夏「あ、うん」

圭吾「あのさ、あの台詞んとこ、『なんだと言うのだ』ってお前の、

あそこ、やっぱもっと飛び込んでくれないと次に行きづらい」

夏「そか、ごめん」

圭吾の白い光を感じる夏。

圭吾の声「でも、今日は全体的にはよかったけど」

という褒める言葉を聞き、つい笑顔になってしまう夏。

それに気づく圭吾。

圭吾「…真面目に聞いてよ」

夏「あ、…はは、ごめん、聞いてます、はは」

そこにマサが現れ

マサ「ちょっとお借りしまーす」

と夏を強引に連れていってしまう。

夏「なにになになに!？」

マサ「緊急召集」

夏「は？」

14 別教室（昼）

誰もいない教室に、夏と香織とマサがいる。

香織「…どうだった？」

夏「えーと、圭吾君の…ことだよな？」

夏、マサを見るが、マサは知らん顔。

マサの声「お前が答えろ、俺は知らん、お前が答えろ、俺は知らん」

夏の声「このやろ〜」

香織「聞いてくれてない…？」

夏「いや、聞いたよね？ねえマサ？」

マサ「…（否定とも肯定ともとれないような首のふりかたをする）」

夏の声「やろ〜まだ逃げるか〜」

香織「聞いてないんだ…」

夏「聞いたよ！圭吾君、香織ちゃんのこと好きだって」

香織「ほんと…？」

夏「ほんとほんと」

香織「でも、圭吾って、そんなこと、他人に言うかなあ」

夏、香織の態度がいつもと違うのに気づく。

夏の声「あれ…香織ちゃん、なんかトゲある…？」

香織の声「…なっちゃん、嘘ついてる…」

夏「いや！圭吾君、香織ちゃんのこと心配してたし、俺はどう思われてもいいけど、香織のことが気になるって」

香織「…そう…圭吾、なっちゃんには、そんな打ち明け話するんだ」

夏「あ…いや、そういうんじゃないで、たまたま…」

香織「最近、圭吾となっちゃんて仲いいよね」

夏「え？それ、どういう意味…」

香織の視線が次第に冷たくなっていく。

香織の声「なっちゃんて…」

夏の声「あ…やだ…光が弱くなってく、あたし、香織ちゃんのこと…好きじゃなくなってく」

香織の声「なんか嘘ばっかつくし…」

夏の様子がおかしくなり、それに気づくマサ。

夏「…あたし…」

夏の声「やだ…聞きたくない…」

香織の声「八方美人で、表裏あるし…男好きなんじゃないの」

夏、香織からの光が途絶える。暗闇。

ショックを受け、青ざめた表情で立ち上がる。

マサ「どした…？」

夏「…」

夏、無言のまま教室から出て行く。

15 河原（夕）

あたりが草むらに囲まれた河原。

夏、草むらのなかで、小さくうずくまって横になっている。

腕時計をみる夏。

夏「…授業…もう終わっちゃったよな…」

上体を起こす夏。

すると、その少し離れた道に、自転車で通りかかる圭吾の姿。

慌てて、草むらに身を隠す夏。

夏「え…なんで…!？」

夏、どこかに逃げようと、ワタワタする。

そして、もう一度、顔を上げると、圭吾が近くにおいて、目が合う。

圭吾「何してんの？」

夏「あ、あはは…いや……カブトムシいるかなーって」

* * *

圭吾、草むらのなかで夏の隣に座る。

圭吾「いいね、ここ」

夏「…圭吾君は何してんの？」

圭吾「いや、授業終わったし、帰ろうかなって思ったら、たまたま」

そのとき、圭吾から白い光。

マサと圭吾が会話しているイメージ。

* * *

稽古場にて、マサと圭吾。

マサ「たぶん河原じゃね、落ち込んだときいつも行ってるから」

* * *

夏「ははは…たまたま」

圭吾「お前とマサって付き合ってるの？」

夏「は!？ないないない、絶対ないから」

圭吾「へえ…まあ、どうでもいいけど」

圭吾、その場で横になる。

圭吾「香織がなんか言った？」

夏「…ん…いや…何も…」

圭吾「なんか、ごめんな」

夏「ほんとに…何も言っただけだよ…」

圭吾、目を閉じている。

カサカサと風に揺れる草の音。

夏はすぐ側にいる圭吾の顔を見つめる。

夏「…あたしにはね…不思議な力があって…好きな人の心が分かっちゃうの…もちろん…便利なときもあるんだけど…本当はね、こんな力、なくなって欲しいって思ってる…この力のせいで、辛くて、怖い思いするから…好きになればなるほど、心の奥が見えちゃうの……小さい頃…お母さんが好きで…一緒にいたくてしょうがないときがあって…そのとき、光が一番強くなって…お母さんの心の奥が見えちゃったの…お母さんね、あたしのこと…邪魔、って思ってた…お母さん自身も気づいてないよな、心の奥の、もっと奥の言葉…たまたまそのときだけ、邪魔って思っただけなのは分かっているけど…すごく辛かった……」

夏、圭吾の顔をじっと見る。

夏「だからね…人を好きになるのが…怖くてたまらないの…」

圭吾、そのとき、いびきをグーっとかく。

夏、微笑む。

夏「…こんなふうには話せたらなあ…」

夏、圭吾の寝顔を見つめる。

夏「ははは…夢のなかでも芝居の稽古してる」

16 稽古風景（音楽シーン）

舞台の稽古風景。

夏と圭吾の息があってくる。圭吾の光を感じる夏。

その光はどんどん大きくなって行く。

夏は楽しそうに、圭吾や、他のクラスメイトと稽古をする。

笑顔溢れる夏。

夏の声「だめだ…止められない…」

夏を見ている香織の表情は冷たい。

しかし、夏は笑顔を絶やさない。

夏の声「怖い…怖い…怖い…どんどん光が強くなる」

圭吾と夏の芝居。圭吾の光。

夏の声「どんだん、圭吾君のことが分かってきちゃう」

笑顔の夏だが、しかし、回りの人に気づかれないぐらいに、
手が恐怖で震えている。震えを押さえようとする夏。

夏の笑顔も無理矢理作られた物。

夏の声「でも…止められない…」

稽古場に誰もいなくなると、夏の笑顔は瞬時に消え、暗く辛そうな表情。

夏の声「圭吾君の心の奥なんか知りたくない…どうせ圭吾君は、香織ちゃんが好きなんだから…」

その場に、倒れるようにしてうずくまる夏。

17 稽古場・放課後

誰もいない稽古場。一人、うずくまっている夏。

ドアがひらき、圭吾が入ってくる。夏、圭吾に気づくと、辛そうにしていた表情を一変させ、
笑顔を作る。

夏「あれー、まだいたんだ？」

圭吾、夏の近くにきて、夏をじっと見る。

夏「…どしたの？」

圭吾「なんか最近疲れてる？」

夏「え？…いや、ないない。元気だけが取り柄のなっちゃんですよ、ははは」

夏、おどけてみせるが、圭吾は真剣な表情。

圭吾「あんま無理するなよ」

夏「平気平気、心配してくれてるんだ、へへへ」

圭吾「バカ、お前の調子が落ちると舞台が」

そのとき、香織が稽古場に入ってくる。夏と圭吾、気づく。

香織は、2人を睨みつけた後、無言のまま、自分の荷物の場所へ。

気まずい空気が流れる稽古場。

香織は、荷物を取り、無言のまま部屋を出て行こうとする。

圭吾「香織」

香織「(立ち止まり)…なに？」

圭吾「一緒に帰るんだろ」

香織「…なっちゃんと楽しそうにしてるから、あたしいない方がいいでしょ」

圭吾「何言ってんだよ」

香織「お芝居の稽古、なっちゃんとしたって言ってたじゃん、好きなだけすれば」

圭吾「は？」

立ち上がる夏。

夏「あの！ごめん、あたしもう帰るから」

香織「なっちゃんてさ、いつもそうやって逃げるよね」

夏「…」

圭吾「やめろよ」

香織「かばうんだ、へえ、優しい、あたしにはそんな優しくしてくれないのにね」

圭吾「やめろって」

香織「圭吾、なっちゃんのこと好きなんでしょ？」

圭吾「…」

夏「そんなことあるわけ」

香織「黙ってて！」

夏「…（香織の大声にビクっとする）」

香織「（圭吾に）どうなの？」

圭吾「…」

夏、圭吾を見ると、強い光。

夏の声「やだ…聞きたくない…聞きたくない…」

圭吾の声「俺は夏が好きだ」

夏「え…？」

夏と圭吾、目が合う。

その瞬間、香織が圭吾をビンタする。

パチンという乾いた音が稽古場に響く。

香織、その場を去り、圭吾も後を追う。

一人、呆然と夏は稽古場に残される。

18 舞台

スポットライトを浴びる夏。

舞台上で演じるミランダ船長の衣装を着ている。

文字『ミランダ船長の物語』

夏の声「今度の舞台であたしが演じるミランダ船長。

彼女は、魔女に支配された国から子供達を救いだそうとします。

けど、本当は、彼女自身が魔女でした。

彼女は自分に魔法をかけ、記憶を失うのです。

この世界を変えるため、自分自身を変えるため、

全てを捨て、たった一人、孤独な船長になったのです」

ミランダ「さあ、いざゆかん、あの嵐の向こう側へと。雨や風や荒波が…」

19 稽古場

夏がぼんやりと天井を見つめながら台詞を口にしている。

夏「（小声でぼそぼそと）雨や風や荒波が、いかに我々を遮ろうとも、

その彼方には、きっとあの空が、あの太陽が待っているのだ…」

ドアが開き、圭吾が戻ってくる。

夏、慌てて立ち上がる。圭吾、自分の荷物を持つ。

圭吾「別れようって言われた」

夏「…」

圭吾「何度目か分かんないよ、はは」

圭吾、出口のほうへ。

圭吾「じゃあ、また明日」

圭吾、稽古場を出て行く。夏、後を追う。

20 同・外の階段

夏が慌てて、ドアをあけ、外に出ると、

圭吾も、戻ってきていた。

夏「あ…」

圭吾「…」

見つめ合う2人。夏、意を決した表情で口を開く。

夏「…あたし、圭吾君のこと…好きになって…だから…」

動きが止まる圭吾。

夏も次の言葉が続けられない。

圭吾「…俺、お前のこと…」

夏「…」

圭吾「…なんとも思っていない。ごめん」

夏の声「ああ…そっか…」

夏「はは…ははは…そうだよ、ごめん、変なこと言っちゃって」

夏、笑顔を圭吾に向けるが、目から涙がぼろぼろとこぼれる。

自分でそれに気づき、笑いながら涙を拭う。

夏「あはは……はは…ごめん、ごめんね」

圭吾「…」

夏の声「圭吾君…自分で、自分の気持ちに気づいてないんだ…」

圭吾「お前とは友達でいたいから」

夏「（笑顔を作るが涙は止まらない） そうだよね…友達」

夏の声「この先も…ずっと気づかないよね…香織ちゃんや、舞台のことで一杯だから…」

圭吾「香織の事は俺がなんとかするから、気にするなよ」

夏「うん」

圭吾「舞台、成功させような」

夏「もちろん」

圭吾、その場を去ろうとする。

夏、笑顔で圭吾に手を振る。去る圭吾。

圭吾が見えなくなると、夏は、表情を崩し、手で顔を覆う。

21 河原（夕）

風で草がそよでいる。

その中で力なく横たわっている夏。

夏「これって…やっぱフラれたんだよなあ……」

鼻をすする夏。

夏の声「あたしはひとりです。これまでもひとり、これからも…きっとひとり…」

目を閉じる夏。

* * *

暗闇の世界にいるミランダ船長。

空間に指を走らせ、光で文字を書く。

文字「孤独な光たちが世界を照らしているのだ」

* * *

ふと目を開けると、太陽の光が見える。

指の間からもれる眩しい光。

夏の声「…あたしの光」

何かに気づいた表情の夏。起き上がる夏。

夏、胸に手を置く。

夏の声「あたしだけの光」

夏、立ち上がり、遠くを見つめる、その目は力強い。

そして、歩きはじめ、草をかき分け進んで行く。

夏の声「たったひとつの光」

夏、走りだす。

そして、大声を上げる。

夏「さあ、いざゆかん、あの嵐の向こう側へと。

雨や風や荒波が、いかに僕たちを遮ろうとも、その彼方には、
きっとあの空が、あの太陽が待っているのだ！」

夏「さあ、碇を上げ、帆を立て、舵をきれ！

まだ冒険は始ったばかり、

この広大な世界に、終わりはないのだ！」

それを土手の上で見ていたマサ。夏、マサに気づく。

マサ、親指をグッとたてる。

夏も親指をたて、笑顔となる。

----了

